

内容／三鷹発の教育改革について、記念講演、パネルディスカッション、ポスターセッションなど

11月6日(土)



授業のようす

内容／小・中・一貫教育の特色ある授業の公開、各学園の特色ある教育活動の研究発表などを各学校(学園)で行います。
時程／①午前11時20分から、全市立小学校にて授業公開(午前11時から各校にて受付)②午後1時30分から、全市立中学校にて授業公開(午後1時から各校にて受付)③午後2時30分から、全市立中学校体育館にて研究発表会など午後3時45分終了予定

11月5日(金)



橋本五郎さん

を行います。
■記念講演／テーマ「陽はまた昇るか?日本の教育」【講師】読売新聞東京本社特別編集委員 橋本五郎さん

日本学習社会学会第7回大会を市公会堂別館にて開催します。(市・市教育委員会共催)

11月7日(日)

教育委員長に秋山千枝子委員、 教育委員に河野純子氏が就任

平成22年6月9日、教育委員会定例会において、委員長に秋山千枝子委員を選任しました。委員長の任期は、同日から1年間です。また、平成22年5月26日、河野純子氏が教育委員に就任しました。委員の任期は、同日から4年間です。

秋山委員長
略歴

「あきやま子どもクリニック」院長。現在、
社団法人日本小児科医会理事、社会福祉
法人子どもの虐待防止センター評議員、
東京都児童福祉審議会委員、三鷹市北野
ハビネスセンター嘱託医、市立保育園嘱
託医なども務める。平成16年10月から三
鷹市教育委員会委員に就任する。



河野委員
略歴

弁護士(東京弁護士会所属)。平成9年
にソフィア法律事務所を開設し、現在に
至る。平成19年4月1日から平成22年5
月25日まで三鷹市公平委員会委員。



⇒総務課 ☎3213

◆「三鷹教育改革フォーラム2010」のスケジュール

11月5日(金)

11:20 小学校での授業公開
(11:00各校にて受付開始)
昼休み(12:05～13:00)
13:30 中学校での授業公開
(13:00各校にて受付開始)
休憩時間(14:20～14:30)
14:30 中学校体育館での研究発表会

11月6日(土)

1 市公会堂ホール(12:00開場)
12:30 郷土芸能「井口囃子」
13:00 記念講演「陽はまた昇るか?日本の教育」
休憩時間(14:15～14:25)
14:25 三鷹の森学園の児童・生徒による合唱
14:40 パネルディスカッション(16:30終了予定)
2 市公会堂ホワイエ(12:00開場)
12:00～16:30 ポスターセッション

近年、大学生の間で勉学への目的意識の喪失や海外への留学希望者が減少しており、これではグローバル化の時代に日本が諸国に後れを取ってしまうのではないかと危惧の声が聞かれる。
留学希望者の減少の理由としては若者の内向き志向や、就職活動の時期が早まっており、留学など考えている暇はないといった事が挙げられている。しかし、他方で、卒業後5～10年を過ぎて社会で働き盛りの社会人たちが「自分でやりたいことが見つかったので、これからのキャリアアップやキャリアチェンジを考えて海外留学したい」という希望や相談を寄せてくることも多くなっている。あるいは中高年層の女性などでも数週間の海外ホームステイや短期留学に出かける人もいる。海外ではなく国内で資格取得や趣味などのために、働きながら、あるいは退職後に、もう一度勉学に励んでみたいという人は意外と多い。この人たちの年齢層は実に多様で、70歳近い人達も珍しくない。
この様に、近年、社会通念として人生のある時期に起こったり行なったりする筈であると思われるきた人生のパターンが、10～20年遅れて生じ、更に、その規則性が乱れてきている。

それにもかかわらず、社会の固定観念の中では大学生活は18歳から22歳までであるべきこと、留学は在学中であるべきこと、22歳で卒業したら就職して60歳の定年まで一企業に勤めること、定年後は趣味を見つけないといけない、などという人生設計のパターンが今でも根強くはびこっている。このパターンに固執しているのは意外と企業や当の大学生達ではなからうか。
企業は大学生の採用には今でも新卒採用優先主義を放棄しようとはしない。大学生もこのことは知っていて、自分を新卒の部類に留め置くために、卒業に必要な単位を既に履修し、卒論を仕上げていても、就職が決まらないうと卒業しようとはしない。働く人たちが大学に再入学して自分の人生や職業の方向を変えようとするには多くの困難がある。働きながら大学生活を送ることとは欧米では普通の現象で、大学生のうち20パーセント以上がこの部類に入るといいうのに、日本ではわずか2パーセントにすぎない。
このような息苦しさは日本の閉塞感を醸し出し、大学生の意欲を削いでいるのではない。平均寿命が80歳前後になった今、この人生設計のパターンを更新しなければならぬ。その際、参考になるのは2500年前の孔子の教えではないだろうか。孔子は「30歳で自立し、50歳で天命を知り、70歳で心の欲するところに従って行動しても社会規範を越えない」というな人生を理想であると言ったのだが、これが人生80年時代にはしっくりいくよううだ。
孔子の教えを我々流に解釈すれば、「大学で学びたければ30歳くらいまではよろしい。また、60歳以上の元気な年齢層も学生として再び大学に入ろう」ということにならうか。大学の40パーセント以上が定員割れを起こしている現在、孔子の言は、大学経営にとっても有効な教訓である。

長寿を生きる新社会通念を創ろう
近年、大学生の間で勉学への目的意識の喪失や海外への留学希望者が減少しており、これではグローバル化の時代に日本が諸国に後れを取ってしまうのではないかと危惧の声が聞かれる。
留学希望者の減少の理由としては若者の内向き志向や、就職活動の時期が早まっており、留学など考えている暇はないといった事が挙げられている。しかし、他方で、卒業後5～10年を過ぎて社会で働き盛りの社会人たちが「自分でやりたいことが見つかったので、これからのキャリアアップやキャリアチェンジを考えて海外留学したい」という希望や相談を寄せてくることも多くなっている。あるいは中高年層の女性などでも数週間の海外ホームステイや短期留学に出かける人もいる。海外ではなく国内で資格取得や趣味などのために、働きながら、あるいは退職後に、もう一度勉学に励んでみたいという人は意外と多い。この人たちの年齢層は実に多様で、70歳近い人達も珍しくない。
この様に、近年、社会通念として人生のある時期に起こったり行なったりする筈であると思われるきた人生のパターンが、10～20年遅れて生じ、更に、その規則性が乱れてきている。



教育委員会委員長
職務代理者
鈴木 典比古

業に勤めること、定年後は趣味を見つけないといけない、などという人生設計のパターンが今でも根強くはびこっている。このパターンに固執しているのは意外と企業や当の大学生達ではなからうか。
企業は大学生の採用には今でも新卒採用優先主義を放棄しようとはしない。大学生もこのことは知っていて、自分を新卒の部類に留め置くために、卒業に必要な単位を既に履修し、卒論を仕上げていても、就職が決まらないうと卒業しようとはしない。働く人たちが大学に再入学して自分の人生や職業の方向を変えようとするには多くの困難がある。働きながら大学生活を送ることとは欧米では普通の現象で、大学生のうち20パーセント以上がこの部類に入るといいうのに、日本ではわずか2パーセントにすぎない。
このような息苦しさは日本の閉塞感を醸し出し、大学生の意欲を削いでいるのではない。平均寿命が80歳前後になった今、この人生設計のパターンを更新しなければならぬ。その際、参考になるのは2500年前の孔子の教えではないだろうか。孔子は「30歳で自立し、50歳で天命を知り、70歳で心の欲するところに従って行動しても社会規範を越えない」というな人生を理想であると言ったのだが、これが人生80年時代にはしっくりいくよううだ。
孔子の教えを我々流に解釈すれば、「大学で学びたければ30歳くらいまではよろしい。また、60歳以上の元気な年齢層も学生として再び大学に入ろう」ということにならうか。大学の40パーセント以上が定員割れを起こしている現在、孔子の言は、大学経営にとっても有効な教訓である。